

る。天照大御神は畏れ多い事であるが現存してゐるか。

大和の國の神々とは一體どんなものか。神と我々との關係は、異宗教の傳來によつて如何なる變化が國內に生じたか。邪神淫祠とは何か。實は我が國の古事記程正確に神代と人代とを區別した貴重な文獻は世界にない。古事記の闡明によつて始めて今日朝野に盛んに叫ばれてゐる民族精神、建國精神、彌榮、皇室中心主義等の言葉の眞髓に觸れることが出来るのだ。光輝ある日本歴史は一面から云へば儒教、佛教、キリスト教、極めて最近は物質文明等の不完全極まる外來思想を超越して、何時か惟神の大道を建設する歴史とも云へる。くだらないヨーロッパ人種の主義主張にかぶれて居るよりも、民族精神に立

脚した文化の建設の爲めに身を献けることが、我々に取つて最上の男性的使命である。君はかかる大民族の主義主張に反對するかね。

物——いや、僕も今少し總ゆる方面のことを考へてみる。

神——だが君に最後に一言注意したい。眞の信仰は我々の智慧や今日迄傳へられて來た凡ての人間の作り出した理窟や理論を以てしては私達に得られない。……ではこの次に又機會があつたら今度は宇宙創造論、神と人との關係、物質と人との關係等に就てお互の意見を披瀝し合をう。僕達は最後まで男らしく戦ふ。そして眞に自らの非を悟つたら相手と同じ目的に身を捧げやうではないか。

初期産業革命に就て

經 二 秋 山 正 明

技術の進歩並びに社會組織の變革たる産業の革命の發生による中世封建社會の崩潰は資本主義發達の第一步に外ならない。

産業革命は英國を其の發生地とし、之れより半世紀後にフランス、續いてドイツ、之れと略々同期にアメリカに起つて居る。我國の産業革命は之等諸國が既に輕工業部門の革命を

終へ、重工業部門の革命に進み始めた頃、即ち明治二十七年の日清戦争後に起つたのである。以下述べんとする初期産業革命なる時代は之の日清戦争直後より日露戦争頃までを云ふのである。然して大體次の様な順序を以て之の初期産業革命に就て愚考を述べて見るつもりで有る。即ち先づ第一に産業革命と明治維新に就き、第二、之の初期産業革命の特質性（之の言葉は不適當かも知れぬが）に就て進めるつもりである。

◆
我國近世史に於て明治維新なる時代が如何に各方面に重大なる關係を有し、且つ影響を及ぼしたかは我々の常に見聞する所である。我國の産業革命も實に之の明治維新の政治的大革命に端を發し、四半世紀後の日清戦争後に於て其の發生を見たのである。

明治維新の政府は先ず封建制度を打破し中央集權を行ひ、次で先進諸國の文明を輸入する事に力を注いだ。之の封建制度を打破すべく政府は先ず徳川幕府の遺物たる士族をして其の古き傳統、慣習より解放する事に務めた。之の古き傳統及び慣習からの解放、之の事は實に重大なる問題である。彼等士族は生れると同時に武家屋敷なる第一次封建社會の傳統慣習の統制の元に置かれ、更に其の家庭に屬して居る封建的の共同社會の傳統、慣習の元に置かれて來たものであるから、即ち

彼等は彼等の生れた封建社會の傳統、慣習、諸制度に對し絶對的な信賴を持ち、其の傳統に生くべく教育されて來た者であるから、明治維新の大革命に依り彼等の社會は崩潰し、新組織をもつて出來上つた當時の世に生くべきには彼等は彼等の過去の全てを清算するより外に道はなかつた。政府は當時之等の士族の浪人化すのを防ぐべく大いに努力せねばならなかつた。即ち政府は厚き保護のもとに荒地開墾を起し、或ひは又國立銀行を起さしめる等々あらゆる手段をもつて彼等を新時代に生かしめんとしたのである。斯の如き政府の苦心努力は、やがて彼等をして其の傳統から離れさせ各自の經濟上の活動を全く自由に成さしめるに至つたのである。斯の如く士族の統制を行ふ一方政府は又一般平民間の殊に農民の方面に於ける封建組織の廢止をなさねばならなかつた。

彼の有名なドイツに於ける經濟學者、シュルツエ・ゲヴェルニツ、(Schulze-Gävernitz) は所有權の確立は産業革命の一要素であると云つて居るが、明治政府も之の土地の所有權に對して明治四年に大藏省達を以つて地所の耕作は持主の自由とする事になした。又之等には寛永十二年以來「田畑永代の賣買仕問敷候事」として禁ぜられて居た賣買の禁を解くに至つた。之れに依り農民は解放され初めて自由を得る事が出來たのである。之等の政府の政策は、其の目的とする所は政府の財政政策として行はれたもので、前者は多分に財政的

政策の色彩を帯びて居ると云ふに過ぎないが、後者に至つては之れ徹頭徹尾政府の財政々策として行はれたもので、即ち其の收入の手段として行はれた、明治六年七月の地租改正條例の結果に外ならぬのである。とは云へ之れに依り自由を得た農民、殊に小百姓が都會に出て所謂賃銀労働者となつて行つた事は、前記の士族の傳統、慣習よりの解放と共に當時政府の手に依つて盛に行はれた先進諸國よりの諸文明の輸入と相まつて四半世紀後に起りたる我國産業革命の最大原因を成したのである。

以上の如く我國の産業革命は明治維新なる政治上の革命と密接なる關係をもつて居るのであるが、けだし一國の産業革命が其の國の政治上の革命に依る原因を有するなどと云ふ事は他の諸國に於ては絶対に見られぬ所であつた。例へば英國に於ては、ワットの蒸汽機關の紡績工場への出進により起りフランスは十九世紀後半に於ける鐵道網の完全により刺戟され、ドイツは一八三四年に成立した關稅同盟により始まりフランス同様鐵道の發達と共に成されて居る。

政治上の革命に依り成された變態的産業革命。然しながら之の事實は當時後進國たりし位置に有つた吾國として當然の道であつたと云ふ事が、これから述べる所に依り幾分でも推察する事が出來ると思ふ。

扱て最初にきめた順序に依り吾國の産業革命の特質性（勿論初期革命の）に就て述べる事にする。之れを都合上大體戰前（日清戰爭）と戰後（所謂初期革命期）とに分けて、更に寔に之の初期革命の期間に完全に其の産業革命を完成した所の紡績業を以つて、之の兩者を結び付けて見る事にする。

戰前の状態を見るに當り先ず第一に當時の金融機關に就てみよう。けだし之の期間は戰後の産業革命に對する準備期であるから、之の金融機關に就ても又次の交通機關に就ても全て戰後の産業革命に對する準備として其の發展を見るつもりである。

扱て金融方面であるが、之れを詳細に見る事は寔では出來ない、で大體年次に従つて其の制度の進展の跡をたどる事にする。

明治五年に政府は米國の國立銀行の制度に依つて國立銀行條例を發布した。然し其の結果之の條例の下に創立されたる國立銀行は僅か其の數四行に過ぎず、且つ其の成績は甚だ面白くない状態であつた。

明治九年政府は國立銀行の條例改正を行ひ、其の結果同十二年末は其の數百五十三をかねて至るに至り、我國の銀行もようやく其の姿を金融市場に現はし、大いに活動する様になつた。然して之れより十九年に至る間各條例の制定改正等々により我銀行業は大いに進展を示し、遂に十九年一日、日本銀

行の兌換制度運用が開始され寔に全國金融機關の實地統制が成される事になったのである。明治十九年を以つて大體其の完成を見た金融機關は續いて起れる交通機關の發達を相俟つて寔に海外貿易の發達を齎らすに至つたのである。然らば當時の交通機關は如何なる發展を示して居たか、以下其れに就て其の大略を述べる。

先づ國內交通の發達を見るべく、之れを當時の鐵道に依つて見るに、即ち明治十年頃より戰前にかけては所謂私設鐵道の熱の最も盛な時代である。之れを當時の官・民共者の開業せる總理數の割合を見ると、明治二十六年に於ける開業總理數一千九百二十四哩中、私設鐵道は實に其の七割近くを占めて居る。之の廿六年の總理數を初期の明治十六年頃の總理數二百四十五哩に比較する時、其の發達の如何に盛んであつたかを知り得よう。斯の如く發展せる鐵道は、又其の各線の連絡の成功に依り當時の國內産業の發達を大いに助長したわけである。

一方海外への交通方面を見るに、明治二十六年に於ける汽船總數は六百八十隻、總噸數十一萬噸を示して居り之れを十六年の三百九十隻、四萬五千噸と比較する時、之れ又かなりの發達振りである。殊に二十六年於ては吾國最初の遠洋航路たる孟買航路の出來た事は當時の海外貿易の發展を裏書きして居るものであらう。

吾産業革命の準備期たる之の期間は以上の如く大體金融機關と交通機關との改善、發展をもつて終つて居る。之の間に於ける工業部面の發展は纖維工業中に於ける紡績業のみに止まる。即ち之の紡績業は初期産業革命中に於て完全に産業革命を成し終へたる唯一つのものであり、又革命期に有つて資本主義的産業のトップを切つたものである。

擬て吾國の紡績業の發展を述べるに先き立つて、一應先進國(殊に英國の)の之の方面の工業の發展を見る事は無駄ではなからう。即ち英國にあつては工業生産の發達程度の底い封建時代——ギルドの時代に於て中世都市と云ふ一つの枠の内で行なわれて居た問屋組織、及び手工場經營が商業資本の強度な力により増大されて、家内工業としての經營形態が生まれ、然して其の發達は必然的に機械の發明をなさしめたのである。其の結果其の機械の發明は封建的な家内工業の形態を資本主義的な工場工業へ導いたのである。けだし之の過程をたどつた最初のものは外でもない、紡績業なのである。

然らば吾國の紡績業も又斯の如き過程をたどつたのであらうか？

前述せる如く交通部内に於ける汽船の發達、海外貿易の發展は政府をして先進諸國の文明の輸入に餘念ならしめた。其の結果我國の産業界は其の必用、不必用に拘わらず各々新式な機械を手に入れたが當時後進國としての我國の産業諸部

門は其等の機械を利用するにはあまりにも幼稚すぎて居た。唯他の部門にくらべ相當發展しつゝあつた紡績業に於て機械は先づ利用される事になったのである。次に當時の紡績業の工場數、及び据付鍾數の増加を示すと、

年次	工場數	据付鍾數
明治 五年	三	八、二〇四
十年	三	八、二〇四
十五年	一三	二八、二〇四
廿年	二一	七六、六〇四
二十五年	三九	三八五、三一四

右の如くである。之の表にても知れる如く工場工業として發達し始めたのは大體明治二十年以後で、それまでは人力に依る手工業が主要な位置を占めて居たわけである。

日清戰前に於て産業革命への諸準備は大體整ひ、之の戰爭を劃して所謂初期革命が遂行されたのである。

前述せる如く戰前政府の力に依り先進諸國より多くの機械が輸入されたが、當時にあつては尙其等機械を使用し、利用するには我國の産業はあまりにも幼稚であつた。

即ち其等機械を使用するべき經濟的な要素に缺けて居たのである。然るに戰勝の結果我國の信用は増大され、又清國より償金三億六千萬圓が流入し來つた結果、信用の増大に依る我

國商品の海外販路の擴大をもたらす一方償金の流入は工場制機械工業の發達に必要な資金を作る事となつた。斯く資金の十分なる供給と、新市場の擴大は其の機械生産に依る大量生産を促進させた。之の大量生産加能の現象は勞働者使用に依る生産費より機械使用のより有利なる事を實證するに至り寔に工場制機械工業への移行を速進せしめる様に成つたのである。以上の如き諸條件が準備期にあつた吾産業部門を日清戰爭を劃して初期革命に入らしめたのである。

斯の如き過程をへて成立せる吾國産業革命の結果は先進諸國の其れのように、職工の失業、或ひは熟練工の不用等々に依る社會的な問題は起らなかつた。

工場工業の發展、之れを前記戰前の紡績業に就いて戰後の状態を見ると

年次	工場數	据付鍾數
明治二十七年	四五	五、三〇、〇七四
三十一年	七二	一、一四六、七四九
三十五年	八〇	一、三〇一、一一八
四十年	八三	一、五〇〇、五七九

以上の如くである。即ち戰前二十五年と三十五年とを比較すると工場數は二十五年の三九に對して四一の増加を示し、据付鍾數に於ては九一五、八〇四の増加を示して居る。けれど之の廿七年より三十八年に至る初期革命の期間に於て紡績

業は産業革命を完了し、手紡絲は某の影を没してしまつたのである。

之の紡績業の發展を先づ輸出の方から見ると明治二十七年には輸出額三百五十九萬斤、價格九十五萬圓であつたが、三十二年には一億萬斤餘、價格二千八百萬餘圓に上昇を示して居る。更に三十六年には九千萬斤餘、價格三千萬餘圓と云ふ増進振りである。斯の如き發展は常に政府の厚き保護と、殊に戦後の前記好諸事情に依つて發展したものであるが、寔にいま一つの重大な原因を見るのである。其れは外でもない當時起つた世界的銀價の下落である。

之の銀價の下落は普佛戦争後に於ける獨逸帝國の金本位制の實施に依る銀の買却に端を發し、其の後年々其の價格は下降線をたどり之れが對策として一八九〇年(明治二十三年)に米國に於ては同年七月に複本位制を維持せんがためシャーマン條令(Sherman Act)を制定した。然し既に此の時世界の銀價下落の勢は如何ともしがたい所まで進んで居たのである。明治十九年以來實事上金本位制を採用しひゝあつた我國にも勿論大きな影響をもたらした、銀價の下落は當時の吾貿易をたしかに好轉させた。

先づ第一に金本位國に對する輸出品の安價に依る輸出の増大である。他面輸入にあつては其の價格の高騰に依る制限・斯くして正價の市場への流入を行ふ一面、國產の保護をなし

たのである。然し之の銀下落は好影響のみを與へてはくれなかつた。好影響の陰にあつた幾多の矛盾は二十三年の恐慌となつて現われたのである。勿論恐慌の直接原因は他にあつた過去三年間繼續した企業熱の反動こそ其の原因に外ならないが、其の時期を早めた所の誘因として二十二年の米穀不作と共に之の銀價下落は見逃がす事は出来ない。

最後に戦前大いに發展すべく準備中なりし金融機關が其の後の發達の結果之の初期産業革命に如何に活動したがに就て少しく述べてみよう。

日清戦争の結果、戰勝國として清國より償金三億六千萬圓を取り、之れにより資金難にあつた我國の産業の發展を大いに助長した事は前述の如くであるが、しかし之の三億餘萬圓の償金も企業勃興の盛な當時にあつては三十一年に早くも其の不足を來たしてしまつたのである。寔に於て政府は外資の輸入に頼る以外に之の資本難を救ふ道のない事を痛感し遂に政府は外資輸入を成すべく、金本位制を採用して之れに當る事となつたのである。

之の外資の輸入の結果吾國の産業革命も急速に全般に渡つて疾驅し得る様になつた。然し之の資金の輸入のみで決して十分に行なわれたのではない、之の外資と内地に蓄積されて居る資金とをより効果的に使用なさしめる所の金融機械の力をかりて初めて其の眞價を發揮することが出來たのである。

戰前同様その例を銀行にとつて見るに戰前に於ける發券銀行たる國立銀行は戰爭をへて預金銀行へと轉じたのである。之の預金銀行への移行は預金銀行の預金吸收の努力により、其の結果は死藏資金の金融市場への流入をもたらし、更に三十二年三月日本銀行保證準備高の擴張、續いて興業銀行、勸業、農工銀行の創立等と相まつて金融機關は大いに發展をなしたのである。

「ナチス」經濟情勢の一考察

經 二 竹 本 信 夫

初期産業革命は次に來る日露戰爭を以つて第二期たる發展期へと移つたのである。

初期革命中に勃興せる諸工業は之の期に入りようやく其の位置を確立するに至つたのである。殊に初期革命期中に一段の發達をなせる紡績業は之の期をへて歐洲戰爭に至る頃は遂に精工品製作の最上段階にまで進んだのである。

——一九三三、一〇、八——

今やあらゆる世界の平和は「力」の上に築かれつゝある。そして世界の平和を約束するものは此の「力」の均衡以外には何物もない情勢となつてゐるのだ……。一九一四年以來嘗つて吾人は斯る不安と絶望とに満ちた世界の情勢を経験したことがない。此の「力」の全貌を分析討論することは暫らくをいて、斯るひつ迫せる世界情勢のもと、その内包たる經濟力或は財政力に關し、専ら、ナチス獨裁資本主義の夫等の問題に對する解剖が今吾人の果さんとする試みである。

リング「世界」に於て血シブキ浴びて、グロツキの苦慘を嘗めたドイツ帝國主義は共和國資本主義としてリング「ヨーロッパ」に擡頭し、既に今日、ナチス獨裁資本主義としてハーゲンクロイツの旗幟も鮮やかに再びリング「世界」に其の鐵腕も振ふべく登場して來たのである。

ドイツ資本主義は果して不死身であるか……。顧るに實際、相對的安定期以來ドイツ資本主義の工作作業の素晴しき進展振りには世界をして讃嘆の聲をあげしめた。